

電力自由化の嵐の中で、欧米諸国が実施している経営改革の中身には感動すら覚えるものがある。フェルミ2号発電所の改革もその一つだ。先週リオで開催されたIAEA主催の「安全文化国際会議」の席上発表された生々しい報告がある。

九六年頃までフェ発電所の営業成績は振るわなかった。運営改革が進んだ今と昔を比較すると、稼働率71%が九三%に、発電価格が三・七ミルから一・八ミルに向上し、計画外停止割合は二五・六%から一・二%に、修理未了件数が八百から三百に減少している。信じられぬほどの業績向上だ。同時に安全状況が著しく好転しているのも特徴だ。

この改革、交代した首脳、の強いリーダーシップにある。マネージャーの自由裁量権

この改革、交代した首脳、の強いリーダーシップにある。マネージャーの自由裁量権

と云う。この事実の経営を続けていけば会社の将来がどうなるかを、従業員と共に調べたい、共に改善策を検討し、共にそれを実行したのだ。その間の苦闘を、報告書は客観的だが如実に述べている。ハイライトは、従業員をしていかにその気にさせたかの意識改革の部分だ。一読をお薦めする。

日本では安全文化といえば、偉い人

# 規制緩和と安全文化

増じた結果、規制と現場の間にあった不満や技術的な溝が埋まった結果だ。



石川 迪夫

いしかわ・みちお 一原子力発電技術機構技術顧問。56年東京大学工学部卒業。日本原子力研究所東海研究所副所長などを経て91年、北子大工学部教授。原子力発電と安全工学が専門。兵庫県出身、68歳。

による原理原則の説教が成功自慢話、もしくは他人様の失敗をあげつらう評論だ。修身道徳の話と同じで、聞くほどやる気が失せる。だが欧米では上の例に見るように、自己反省に立つ実践改革が安全文化だ。この差が千里を分ける因となる。

これが業績改善の力となった。

は当然として懸念は二番にある。

自由化を前に欧州の規制緩和も進んでいる。多くの発電所の出力が、建設許可時の一、二割増しになっているの

設計で機械的に採用した安全余裕を運転実績をもとに見直しした結果らしい。一部のアップといえは、日本では

自主検査を定期的に行うことを法的に義務づけ、記録等の保存を行わせる

フェ発電所の業績向上は現場と規制の溝が埋まることで達成された。それは規制緩和が意識改革を可能にしたからだ。政府も国会もこの事実をしっかりと認識し、高い安全文化が育つよう配慮せねば日本の原子力は遅れる。

原発五基分の新設に相当する。参考とすべき規制緩和策だ。

普通に通読すれば、これまで自主検査で済んでいた安全上と重要なでない事柄が、法人による検査、法人から安全保安院への報告、安全委でのチェック

見逃してはならぬ点は、今回の改正に多数の現場職員が関与していたことだ。その多くは、家にあつては善良なお父さん、職場では真面目な技術者に相違ない。そんな人達が加担したの